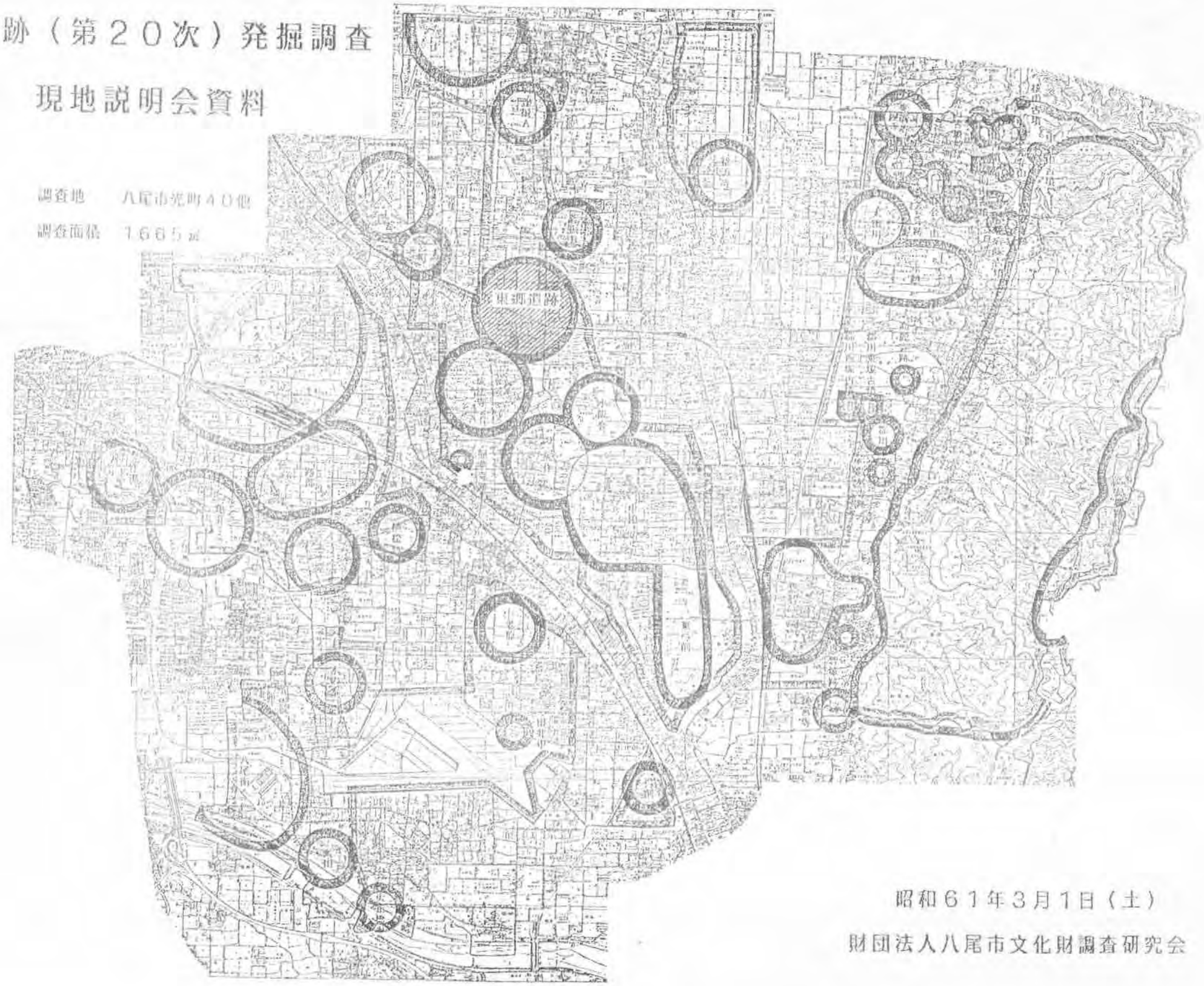
東郷遺跡（第２０次）発掘調査

現地説明会資料

調査地　八尾市光町４０他

調査面積　１６６５㎡



昭和６１年３月１日（土）

財団法人八尾市文化財調査研究会

1　調査の経過

今回の調査は、八尾市文化会館建設に先立って行ったもので、東郷遺跡内で実施した調査の第20次調査に当たります。昭和60年11月１日から面積1200㎡を対象に調査を実施した結果、古墳時代前期の方形周溝墓７基・土坑墓１基と近世の井戸５基・溝多数を検出しました。以上の結果から、古墳時代前期の遺構を追求する目的で、調査面積を465㎡追加しました。

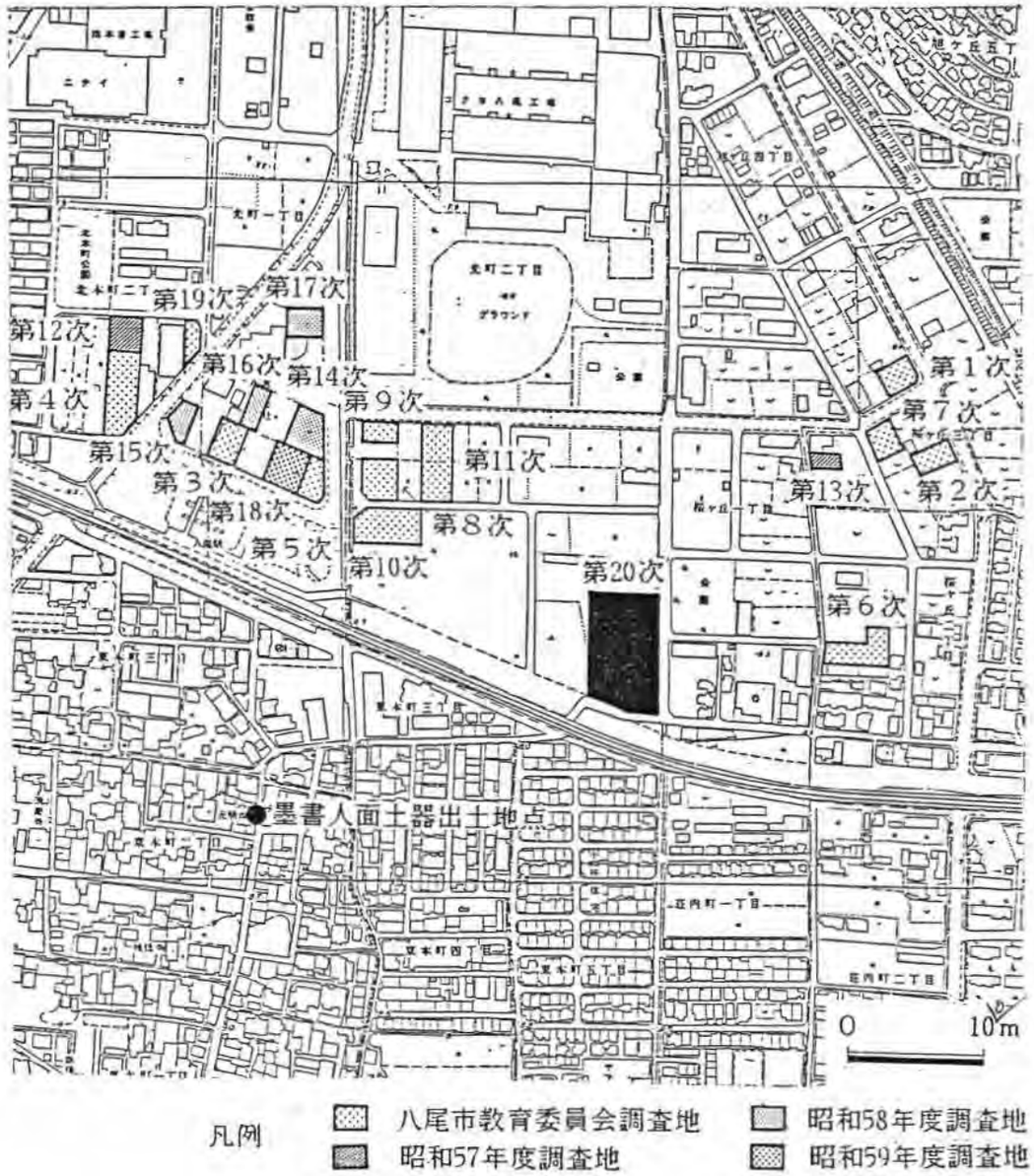
2　遺跡の概略

東郷遺跡発見の契機は、昭和46年４月、東本町２丁目で奈良時代の墨書人面土器が出土したことによります。しかし、それ以降は目立った開発も実施されず付近一帯のどこかに、遺跡が存在しているであろうと推定されているにすぎませんでした。しかし、昭和55年以降になりますと、近鉄八尾駅の移動に関連した開発が各所で実施されるようになり、発掘調査の回数を重ねる結果となりました。

現在まで実施しました20回にわたる調査結果を総合しますと、東郷遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であったことが窺(うかが)えます。

まず、東郷遺跡で集落が営まれ始めるのは弥生時代中期であったようで、遺跡範囲の南西に位置します第15次調査地でこの時期の土坑が検出されています。しかし、本格的に集落が営まれ始めるのは、古墳時代前期であったようです。この時期の集落の居住地域は、第５次・第８次・第９次・第11次・第14次調査地で検出されており、竪穴式住居・掘立柱建物を中核とする集落であったことが窺(うかが)われます。この時期の墓域は、第17次調査地(方形周溝墓１基・壺棺３基）と今回調査の第20次調査地（方形周溝墓７基・土坑墓１基）で検出されており、集落の北西と南西をしめています。

古墳時代中期以降の集落は、第１次・第２次・第６次・第13次調査地で確認されており、遺跡範囲の北東部に移動したようです。このような傾向は、続く奈良時代・平安時代も同様であったようです。



東郷遺跡発掘調査位置図

3　検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代前期〔庄内式期〕に比定される方形周溝墓７基（ＳＸ－１～ＳＸ－７）・土坑墓１基（ＳＫ－１）・土坑２基（ＳＫ－２～ＳＫ－３）と近世の井戸５基・溝２条および鋤跡と考えられる小溝があります。

★古墳時代前期の遺構

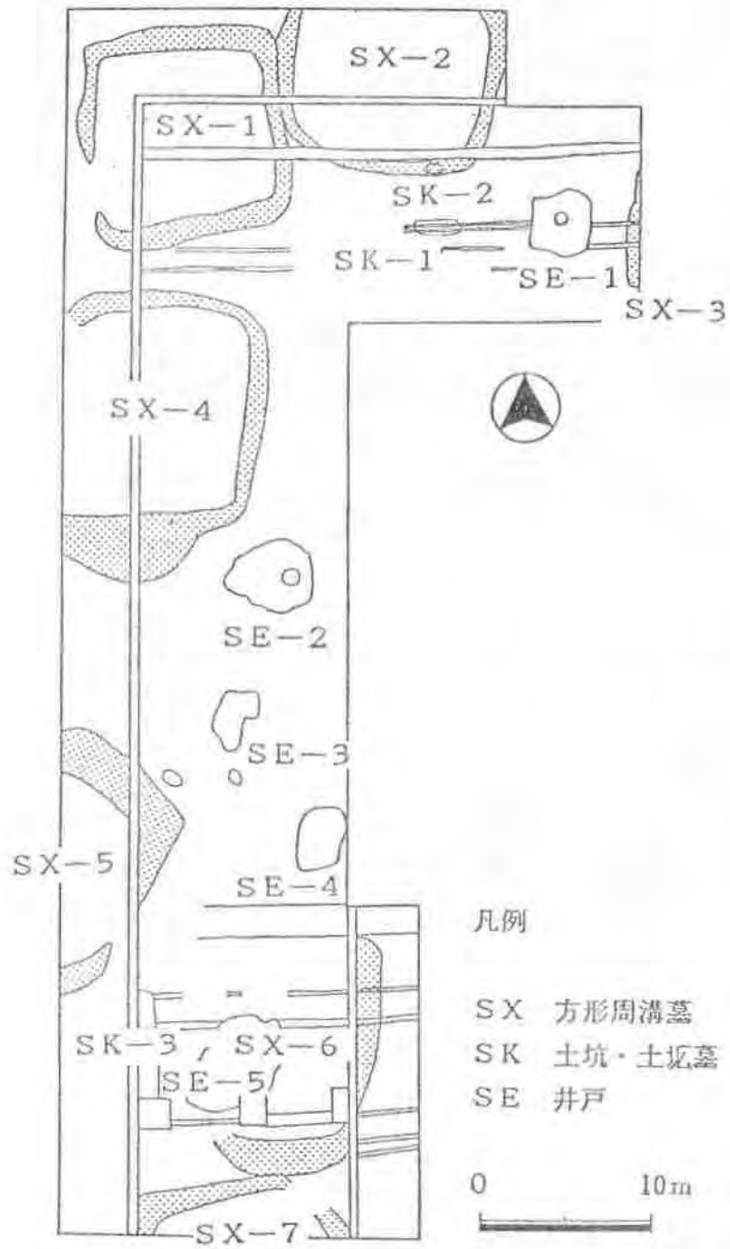
方形周溝墓　（ＳＸ－１～ＳＸ－７）

７基検出したうち全容を知り得たものはＳＸ－１にすぎませんが、検出部分から推定しますと、規模は10～11.5ｍあったようで、この時期の方形周溝墓としては大きい方に属します。墳丘は、他の調査例から推定しますと、1.7ｍ程度の高さを持ったものであったと思われますが、当調査地では後世に削平を受けており、まったく遺存していません。周溝幅は、ＳＸ－４のように一部４ｍにおよぶ部分も認められますが、他は0.5～２ｍを測ります。深さは、0.1～0.3ｍでＳＸ－２を除けば周溝幅が広いほど溝が浅いことが指摘できます。

遺物はＳＸ－１から甕1個・ＳＸ－２から甕1個〔庄内甕〕・ＳＸ－３から甕２個〔庄内甕〕・ＳＸ－４・ＳＸ－５からは二重口縁壺１個が出土しています。これらの遺物は、すべて周溝内の最下層から出土しています。

方形周溝墓（ＳＸ）数値一覧表（単位：ｍ）

略号	規模	周溝幅	周溝の深さ	備考
ＳＸ－１	10	1.0~1.5	0.25	陸橋部
ＳＸ－２	11	1.0	0.1~0.2	
ＳＸ－３	—	0.5以上	0.25~3.0	
ＳＸ－４	11.5	0.5~4.0	0.25	陸橋部
ＳＸ－５	11	1.5~3.0	0.2	陸橋部
ＳＸ－６	10~11	1.0~2.0	0.2	
ＳＸ－７	10	0.5~2.0	0.1	陸橋部



東郷遺跡（20次調査）検出遺構平面図

土坑墓　（ＳＫ－１）

上面楕円形を呈するもので、長径2.0ｍ・短径0.9ｍ・深さ0.25ｍを測ります。ほぼ平坦な底部には、未加工の木片３本が南北方向に平行に置かれており、さらに東隅には大型壺が口縁部を下に向けた形で埋置されています。以上から、頭位を東にもつ埋葬形態で、底部に置かれた木片は棺台の役割を果たしたものと推定されますが、堆積層からは木棺に該当する土層は確認されていません。

４　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期〔庄内式期〕に比定される方形周溝墓７基・土坑墓１基を検出し、東郷遺跡に新たな知見を加える結果となりました。以上のことから、今回の調査結果と今日まで実施しました調査成果を含め、古墳時代前期の東郷ムラの様相を復元してみたいと思います。

東郷ムラは、旧大和川の主流でありました長瀬川と玉串川の沖積作用によって形成された、三角州状の低平地に位置しています。ムラの南側（近鉄大阪線付近）には、小河川が流れていました。この河川は、南東方向から流れてきたものでありますが、この付近で流路を西へ変えていたようです。川が流路を変える地点（近鉄八尾駅北側）一帯は、湿潤な土地で沼沢地が形成されていたようです。ムラの居住地は、この沼沢地の北側一帯（西武百貨店の西側および北側）に作られており、調査では竪穴式住居12棟・掘立柱建物12棟が検出されています。ムラのお墓は、居住地の南東側（第20次調査地―方形周溝墓７基・土坑墓１基）と北西側（第17次調査地―方形周溝墓１基・壺棺３基）の２ケ所にあります。ムラの水田は、まだ調査では確認されていませんが、おそらく沼沢地の西側一帯にあったものと考えられます。ムラのなかを見渡しますと、このムラでは在地産の土器のほかに吉備地方（岡山県）・山陰地方（鳥取県・島根県）の土器を使用していることが窺えます。このことは、東郷ムラがこの時期に外部と活発な経済活動を行っていたことを物語っています。

※　用語説明

方形周溝墓

Ｖ字形もしくはＵ字形に掘った溝が、方形または円形にめぐるもので、溝で囲った中央部には土坑墓や木棺墓などを、埋葬施設としてもうけるものです。弥生時代の前期に畿内に始まり、その後、各地に波及していった墓制の一つであります。本遺跡の周辺では、成法寺遺跡・萱振遺跡・八尾南遺跡・加美遺跡で、本調査地と同時期の方形周溝墓が検出されています。

※　メ　　モ